

Reactor PHysics Asia に参加して

東京工業大学 環境・社会理工学院 融合理工学系
小原研究室 博士後期課程1年 桑垣 一紀

私は、2017年8月25日～26日に中国・成都で開催された Reactor PHysics Asia 2017 (RPHA)に参加し、「Preliminary Study of Burning Wave Reactor with Continuous Fuel Movement」というテーマで研究発表を行いました。同年の7月ごろに、指導教官である小原先生に、RPHA に出てこれまでの研究成果を発表してみないかと勧められて参加する運びとなりました。

前日に成田空港を出発し、上海で飛行機を乗り継ぎ、成都空港へ向かいました。海外での単独移動は初めての経験だったので非常に緊張しました。無事に会場のホテルまでたどり着けた時は安心しました。会場は想像していたよりも遥かに豪華なホテルで驚きました。受付には大きな看板が設置され、水色の T シャツを着た学生たちが対応をしていました。名前を伝えて参加費を払うと、企業のマークがついている小箱に入った、パンダの置物をお土産として渡されました。企業がスポンサーについていて、参加者全員に配っているようでした。中国は今、原子力産業に莫大な資金を投じて開発を促進していると聞いていましたが、その一端を垣間見た気がします。オープニングプレナリーは、数百人程収容できる大きなホールで行われました。様々な国の人がいて、英語や中国語、韓国語が飛び交い、国内の学会とは全く異なる雰囲気を実感しました。

国際会議での発表は初めての経験だったので、当日までに何度も発表練習を行いました。そのかいあってか、当日は緊張に吞まれず、会場の人たちを見渡す余裕もあり、自分では満足のいく発表ができました。ただ、主催者側が用意したパソコンで発表を行ったため、スライド中の動画が動かないというハプニングがありました。次回からは動作確認をするか、もしくは自分のパソコンを使う必要があるという反省点が得られました。質疑応答では、質問者の言っていることが理解でき、自分の言いたいことを英語でしっかり伝えることができました。私は、修士課程の時から博士後期過程に進学することを決めていました。博士課程に進めば、国際会議でのしっかりした発表が求められ、また、様々な国の人たちと接する機会があるので、英語を日々勉強してきました。今回、質疑応答で他国の人たちと英語でしっかりとコミュニケーションを取れたことで、その成果が感じられ非常にうれしかったです。また、大変良い経験となりました。

自分の発表以外の時間には、主にモンテカルロ手法や燃焼計算に関する発表を聴講しました。中国は今、自国の炉物理計算コードを開発している最中で、この分野に関する発表が多く、また熱気があったことを覚えています。中国や韓国の学生と何回か話す機会があり、

そこでも英語でコミュニケーションがとれました。ただ、もっと積極的に色々な人と話せばよかったと少し後悔しています。次の国際会議では、もっとたくさんの人と話してみようと心に決めました。

二日目の夜に、他の参加学生や先生方と四川料理を食べに行きました。お店までの道中では、道路に大きな穴が開いていたり、バイクが歩道を走ってきてクラクションを鳴らされたりと、日本とは違う点がいくつもみられました。お店に着くと、中心に鍋が設置されたテーブルに案内されました。鍋の中には赤い汁が入っていて、オレンジ色の大きな塊がいくつか浮かんでいました。店員さんが火をつけると、その塊が溶け出して油膜が出来たので、それが油だということがわかりました。肉や野菜、麺などを注文し、鍋の中に入れて食べました。非常に辛く、汗がたくさん出ました。蛙の脳みそといったゲテモノ料理もあり、興味を惹かれましたが、注文はしませんでした。

話がそれてしまいましたが、最後に、今回国際会議で発表する機会を与えてくださり、またその準備にお力添えいただいた小原先生、このような貴重な経験の場を提供してくださいました日本原子力学会炉物理部会の皆様に、深く感謝するとともに、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。



写真1 Opening plenaryの様子



写真2 二日目の夜に食べた四川料理